68

# 幕末在村医と天然痘
## ――栃木県塩谷町道下村青木家文書から――

戸村　光宏，岡　　一雄
塩谷医療史研究会

栃木県塩谷郡塩谷町の道下村の青木家は幕末から明治時代にかけて代々医の家系であり，村役人も務めていた．その青木家から大量の文書が発見され，現在，整理と分析が進められている．文書には，村役人としての行政文書や祭礼関係のものが多く含まれているが，医療関連のものとして，患者名・病名・処方薬・謝礼金等を記した寿命録が12冊（最古のものは文政4（1821）年）や青木家代々の秘伝薬集やコレラ（冷徹疫）証治方などの治療法を記した文書，売薬関連，種痘関連の文書などが含まれている．

今回，これらの文書から天然痘と種痘関連の史料を取り上げた．天然痘の症状と治療に関しては二代目泰順が写し，その子の三代目尚之が書き加えている．痘瘡の出る場所や色調，症状が絵入りで詳しく書かれ，漢方治療の処方が書かれている．発熱期に升葛根湯，発疹が水泡になる時期に神功散，黄蝋色の膿になる頃に千金内托散を用いていた．その他，消毒散血湯や大連翹湯なども用いていた．また，加療の甲斐なく，死亡した児の記録なども記載されている．

種痘関連の文書では，宇都宮藩の藩医長澤仲庵が種痘のために東房村から当村（道下村）を経由して田所村に向かったことが記載されていた諸向控覚帳（1859年）の他に，文久元（1861）年，同2（1862）年，元治2（1865）年，慶応2（1866）年，同3（1867）年，明治3（1870）年，同4（1871）年，同5（1872）年，同6（1873）年の計9冊の植疱瘡植付并相改帳または種痘姓名控帳が残されていた．

従来，下野の地では壬生藩や足利地区，大田原藩などは幕末に先進的に種痘が行われていたと報告されているが，宇都宮藩はそれら史料が残されていなかったために明治維新後に種痘が始まった種痘後進地と考えられていた．青木家の文書から当時宇都宮藩領であった道下村でも安政6（1859）年には藩医と在村医が協力して種痘が行われていたことを確認することができた．これは栃木県の種痘史を書き換える新発見である．1868，69年の記録が残っていないのは戊辰戦争で宇都宮が戦場になったという事情が影響し種痘自体が行われなかったのではないかと推測される．また1863，64年の記録がないのは，常陸，下野を揺るがせた天狗党事件などの世相が影響しているのかもしれない．姓名控帳には住んでいる村名，名前，年齢や左右に痘苗をいくつ植えたかについて記載されている．また，種痘を行った時期は年により異なるが，概ね2月，3月から始まり，遅くとも6月上旬には終了しており，天然痘の流行する春に合わせて行っていたことがわかる．また，種痘を行う日はきちんと7日ごとになっており，痘苗の継や接種の成否の判定も行っていたよう「再植」「再植不生」などの記載が見られた．

在村医が何代にもわたり書き残した青木家文書は栃木県内では他に類を見ない貴重な資料である．今後，寿命録や売薬卸控帳などを詳しく分析することにより，幕末の農村部における疾患と治療，在村医の経済状況などが明らかにされると考えられる．